

ボランティアセンターで働いて
～他人に甘えてもいいんだよ～

2022年6月26日

佐藤ひろ子さん

40歳代

宮城県亶理町

聞き手：亶理の女性聞き書きグループ

および千葉直美

石巻からバスと電車を乗り継ぎ亶理町へ向かった。宮城県南部の3.11の被災地を訪れるのは初めてだった。日帰りだけれども小さな旅である。車窓からの田畑や自然は初夏の日差しで美しかった。亶理の女性聞き書きグループと初めてお会いし、そして聞き書きに同席させていただくことになっていた。小さな浜吉田の駅に降り立つと、NPO法人「虹色たんぽぽ」代表S・Sさんが大きく手を振り笑顔で出迎えてくれた。なぜだか初対面とは思えない。

津波で全壊のご自宅を修復し、子供や高齢者を対象とした居場所作りと支援活動をしている。彼女がまとめている聞き書きグループは、3.11を経験した人たちに話を聞き書き、自分たちで印刷し製本し手作りの冊子を作っている。そのかつてのご自宅の一軒家におじゃますると、タケノコごはん、ずんだおはぎの昼食をごちそうになった。窓際には梅干し用の梅が干されていた。

この日、聞き書きのためのお話をしてくださるH・Sさんが玄関に現れた。なんだか近所の女性がふとたちよったような気軽さが漂うのは、声の質か、高さかだろうか。社会福祉士として地域づくり・人づくりに取り組み、福祉の向上につとめているSさんは、地域住民との世間話から福祉の必要性の糸口をつかんでいる。この地域の人は近所同士、気にかけているらしい。Sさんは、あの震災当時、地域のボランティアセンターのセンター長として立ち上げに関わり、全国からのボランティアと被災者のマッチングに取り組んだ。

「非日常の中でまとめ役となり責任を背負っていました。任せてくださいと、むきになって自分たちだけで一か月、がんばりました。でも後で振り返ると、丁寧にやっていたか？きちんと優先順位がつけられていたかわかりません。被災者の多くは、自分たちでここまでやったから、後はボランティアへお願いという自立した人々で驚きました。私は地元だから、休んでいられないと思っていました。歯が痛くなったり蕁麻疹がでました。住民から携帯電話が鳴りっぱなしが続くと、一時期、恐怖を覚えました。GW明けからだんだん落ち着き冷静になり始めました。少し肩の力が抜けました。かたくなに頑張ることしか考えられませんでした。他の地域の応援職員や企業の方々の力が大きく広がっていき、他人にもっと甘えればいいんだと気が付きました。自分たちだけで100パーセントするのではなく、外部から

の応援に甘えられるようになった。」

「2か月後、気が付くと泣いていました。震災について、町について、どうしたらいいのか、心苦しく、住民の皆様とうまく答えられませんでした。思ったようにできず、これでいいのだとうかと日々反省。あの時は、子供たちの母としてできていないことがたくさんありました。『仕事の方が大切な？』と娘から言われました。もう子供たちとの時間は取り戻せません。取り戻しがつきません。子供たちは、あの時の自分を母としてどう思っているのか、聞けません。下の子は、雨が降ると泣くようになり、カーテンを閉めます。雨に濡れただけで泣きます。

私の責任？ 一緒にいてあげればよかった？ 子どもに、ごまをする現在の私です。就職をして、仕事でつまづく娘に『仕事はそんなものだから』と励ます自分。あの3.11の時もそうだった、二人の子供にがまんさせた。自分はしつけが厳しい家で育ち、親に従うのはあたりまえで、役に立つ“いい子”になり、ちゃんとしていなくちゃと思って育ちました。

夫への感謝があります。私は再婚で、前の結婚の時と子供と、震災後に結婚した夫との子どもも、分け隔てなくかわいがってくれました。

私は人とつながり、特に子育て支援をしたい。もっと住民をつながりたい。助かった命なのだから、仕事をしっかりしたいです。特に一人親の子育て支援をしたい。自分も離婚して一人親の経験があるので。今は、仕事好き、趣味みたい。ボランティアセンターで女性の自分が所長でしたが、他のスタッフやボランティアは意見を言いやすかったみたいです。融通が利いたし。

これから同じような経験をする人たちに伝えたいのは、一人で頑張らないで。みんな助けてくれるよ！ということと、この先、地獄！もうだめだと思ったら、『休めるよ！』と言いたい。

一気にしゃべった彼女は、近所の方が届けてくれた玄関先の、まだ皮のついたタケノコをもらって帰っていった。